



Supported by
 日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

日本財団
ヤングケアラーと家族を支えるプログラム
2022年度助成事業
「子ども・若者を権利主体とする
包括的な子ども・若者ケアラー支援モデルの開発」
事業報告書

立命館大学
子ども・若者ケアラーの声を
届けようプロジェクト
(Young Carers Action Research Project:YCARP)

2022年度実施事業

日時	事業名	内容 ※括弧内は講師名
4/10(日)	第6回定例ミーティング	「精神病の親を持った子どもの話」
5/7(土)	第7回定例ミーティング	「子ども・若者ケアラーの就労支援・プレインでのケアラーに対する取り組み」
6/25(土)	第8回定例ミーティング	「精神疾患のある母のケアを担った経験」
7/24(日)	第9回定例ミーティング	「メディアのヤングケアラーの取り上げについて～元ケアラーとしての立場とメディア社員としての立場から～」
8/7(日)	第10回定例ミーティング	「若者ケアラーからダブルケアラーへ～なぜケアは集中してしまうのか？～」
9/11(日)	1周年記念イベント 『子ども・若者の「声」を聴く』(第11回定例ミーティング)	<ul style="list-style-type: none"> ・「僕とオトウト」上映会、監督トークショー(高木佑透氏、清崎鈴乃氏) ・講演会「子どもアドボカシーと当事者参画のモヤモヤとこれから」(長瀬正子氏)
10/22(土)	第12回定例ミーティング	「ケアの連続性を意識した人生設計について」
11/12(土)	当事者ととともに考える子ども・若者ケアラー支援のための専門職養成講座(1日目)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本財団からのごあいさつ ・「なぜ子ども・若者ケアラーなのか」(斎藤真緒氏) ・「逆境の中にある子ども・若者に対する相談支援の基礎理念」(井出智博氏) ・ワークショップ①(自己紹介、現場でのヤングケアラーをめぐる課題の共有)
11/13(日)	当事者ととともに考える子ども・若者ケアラー支援のための専門職養成講座(2日目)	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校と地域の居場所から見える子ども・若者ケアラー」(幸重忠孝氏) ・「精神保健福祉におけるケアラー支援」(知名純子氏) ・ワークショップ②(学校を起点としたケアラー発見・支援をめぐる課題)
11/27(日)	第13回定例ミーティング	「認知症の祖母のケアとイギリスでのケアラー支援団体での経験」

日時	事業名	内容
12/17(土)	当事者とともに考える子ども・若者ケアラー支援のための専門職養成講座(3日目)	<ul style="list-style-type: none"> ・「家庭医療・在宅医療から考える、子ども、きょうだい、家族の支援」(高橋昭彦氏) ・「きょうだいという立場から考える家族ケア」(松本理沙氏) ・ワークショップ③(家族まるごと支援をめぐる課題)
12/18(日)	当事者とともに考える子ども・若者ケアラー支援のための専門職養成講座(4日目)	<ul style="list-style-type: none"> ・『改めて子ども・若者の「権利」を考える』(國本依伸氏) ・「多機関・多職種連携での子ども・若者ケアラー支援」(橋本達昌氏) ・ワークショップ④(全体総括—支援者ネットワークの構築) ・修了式、閉会式
2023/1/28(土)	子ども・若者ケアラーにとってのこれから～キャリア・住まい・人間関係 etc.～	<ul style="list-style-type: none"> ・「就職活動における、ヤングケアラーの経験の活かし方」(羽田啓一郎氏) ・「ケアか自分の人生か、迷ったときに考えること」(高岡里衣氏)
2023/2/14(火)	イギリス視察	Sheffield Young Carers ヒアリング (Sara Gowen氏らスタッフ)
2023/2/15(水)	イギリス視察	<ul style="list-style-type: none"> ・ Sheffield Young Carers ヒアリング・交流 (ヤングケアラーの親グループ、アクショングループ) ・ Paul Blomfield氏 ヒアリング
2023/2/16(木)	イギリス視察	Helen Leadbitter氏 (The Childrens Society) ヒアリング
2023/2/17(金)	イギリス視察	Andy McGowan氏 (Carers Trust) ヒアリング
2023/2/25(土)	日本版ヤングケアラーアクションデー 『子ども・若者ケアラーの「声」を社会に発信する』(1日目)	<ul style="list-style-type: none"> ・「子ども・若者ケアラーについて知っていますか？—18歳を過ぎた若者ケアラーからのメッセージ」お披露目会 ・講演会「ヤングケアラー：研究、政策、実践—イギリスの発見と国際的視点」(Saul Becker氏)
2023/3/4(土)	日本版ヤングケアラーアクションデー 『子ども・若者ケアラーの「声」を社会に発信する』(2日目)	<ul style="list-style-type: none"> ・講演会「ヤングケアラー支援の展開：聴くこと、学ぶこと、ケアから離れることの重要性」(Sara Gowen氏) ・若者ケアラー当事者の声

目次

定例ミーティング・拡大版ミーティング	・・・・・・・・ p.4
当事者とともを考える子ども・若者ケアラー支援のための専門職養成講座	・・・・・・・・ p.9
「子ども・若者ケアラーにとってのこれから～キャリア・住まい・人間関係etc. ～」	・・・・・・・・ p.12
イギリス視察（事業項目：海外視察研修） Sheffield Young Carers スタッフとのミーティング	・・・・・・・・ p.14
イギリス視察（事業項目：海外視察研修） Sheffield Young Carers 親たちとのミーティング	・・・・・・・・ p.17
イギリス視察（事業項目：海外視察研修） Sheffield Young Carers アクショングループ 交流	・・・・・・・・ p.20
イギリス視察（事業項目：海外視察研修） Paul Blomfield氏とのミーティング	・・・・・・・・ p.23
イギリス視察（事業項目：海外視察研修） The Children's Society スタッフとのミーティング	・・・・・・・・ p.26
イギリス視察（事業項目：海外視察研修） Carers Trust スタッフとのミーティング	・・・・・・・・ p.29

定例ミーティング(第6回～第13回) 拡大版ミーティング (国際シンポジウム)

○実施日時・実施形態・実施場所

- 第6回 2022/4/10(日) オンライン開催
- 第7回 2022/5/7(土) オンライン開催
- 第8回 2022/6/25(土) オンライン開催
- 第9回 2022/7/24(日) オンライン開催
- 第10回 2022/8/7(日) オンライン開催
- 第11回 2022/9/11(日) 対面・オンライン、(対面：立命館大学朱雀キャンパス)
- 第12回 2022/10/22(土) オンライン開催
- 第13回 2022/11/27(日) オンライン開催
- 国際シンポジウム 2023/2/25 (土)、3/4 オンライン開催

○参加者・参加人数

- 第6回 参加者 22名
- 第7回 参加者 29名
- 第8回 参加者 30名
- 第9回 参加者 20名
- 第10回 参加者 26名
- 第11回 参加者 75名
- 第12回 参加者 18名
- 第13回 参加者 19名
- 国際シンポジウム 参加者 約75名
(のべ 約314名)

○事業内容

- 第6回 「精神病の親を持った子どもの話」
- 第7回 「子ども・若者ケアラーの就労支援・ブレインでのケアラーに対する取り組み」
- 第8回 「精神疾患のある母のケアを担った経験」
- 第9回 「メディアのヤングケアラーの取り上げについて～元ケアラーとしての立場とメディア社員としての立場から～」
- 第10回 「若者ケアラーからダブルケアラーへ～なぜケアは集中してしまうのか?～」
- 第11回 ・映画「僕とオトウト」上映会、高木監督トークショー
・講演会「子どもアドボカシーと当事者参画のモヤモヤとこれから」
(YCARP 1周年記念イベントとして開催)
- 第12回 「ケアの連続性を意識した人生設計について」
- 第13回 「認知症の祖母のケアとイギリスでのケアラー支援団体での経験」
- 国際シンポジウム
＜2月25日＞
 - ・「子ども・若者ケアラーについて知っていますか?—18歳を過ぎた若者ケアラーからのメッセージ—」お披露目会
 - ・Saul Becker氏による講演会「ヤングケアラー：研究、政策、実践—イギリスの発見と国際的視点」
- ＜3月4日＞
 - ・Sara Gowen氏による講演会「ヤングケアラー支援の展開：聴くこと、学ぶこと、ケアから離れることの重要性」
 - ・若者ケアラー当事者の声

○参加者の感想（一部抜粋）

第6回

・2時間があったという間でした。社会が家族に込められた機能、価値観をどう乗り越えられるだろう・・・と考える時間でした。
・当事者の立場として参加して共感するところがたくさんありました。なかでも共感したのが傷ついた言葉です。「すごいね、えらいね」や「もっとがんばらないといけないよ」等の言葉は、どこか他人行儀で知らず知らずのうちに、当事者の心に蓋をしていってしまうのではないかと感じました。一方で、そういった言葉をかけた方々は、悪気はなく、心から元気づけようとして、いった方々もいたと思います。そういった点で、両者(当事者と支援者)の考え方の相違を認識していくこと、そして、当事者の経験や想い、考えを可能な限り知ってもらうことの重要性を改めて感じました。

第7回

・これまでと少し違う視点からのレポートで新鮮でした。就労とケアラーという観点もさまざま広がりがあると感じて狭い意味での福祉・教育的支援とは異なるかわり方の可能性があるなと思えました。
・福島さんの経験からくる言葉一つ一つがきれいごとではなくダイレクトに響くものが多くありました。これから支援団体を立ち上げていくうえでこちらの自己満足にならないように常に中心に個人のケアラーを意識し一人一人の背景(種類・程度・立場)を見極めたうえでその方が求める支援をつなげて行ければと思います。

第8回

・亀山さんのお話では、経験談はもちろんのこと、ケアラーの中のマイノリティの意見を出せる場がないなど、考えさせられました。また、私たちが取り組んでいるダブルケアの対象となる方たちと悩みが共通する部分も多いと感じました。
・実践地域では様々な整備がすすんでおらず、sswとしてのリファーマ先がありません。リファーマ先を作っていくことについても、今後議論できたらいいと思います。

第9回

・ケアラーの置かれる現状をどうマスコミに伝えていくのか。子供だけでなく、ケアを受ける保護者からの視点も大事なことだと思いました。井上さんがいうようにケアラーという言葉が独り歩きして、イメージが定着してしまっていることもあると思います。問題は個々の家族で違うと思うので、取材ではしっかりと伝え、内容に違和感を感じたらはっきりと言うことが大切と思いました。最後に出ていたスピーカーズバンクの活動もぜひ知りたいなと思いました。
・取材者とどう対するかという問題は、広くアドボカシーの問題として捉えられるなと思いました。スポークスパーソンにあたる人を立てるとしても、たとえば取材に同席する団体の担当者のかたも、もっと言えばマスコミの記者もディレクターも、当事者について外部に伝えるアドボケーターだと捉えれば、それにふさわしい知識と技術、当事者の発言をそのまま聞く謙虚さを持っていてほしいと思います。当事者の方が証言を預ける相手を選ぶことができるのが一番いいですね。

第10回

・ケアの多様性やジェンダー、家族でケアをするのが当然という社会認識の根強さを改めて振り返る内容でした。
・ダブルケアという名前がつくことで、見えなかったものが浮き彫りになるので、社会に問いかけるきっかけにも、自分がそうなんだと知る機会になるので、言葉が与える影響は大きいと感じました。

第11回

・さびしいものはさびしい切ない感情にオトウトが気づかせてくれたオトウトとの会話がリアルに伝わってきました
・きょうだい＝ヤングケアラーという見方をしてしまいがちになっていて、それぞれ置かれている立場は違うかもしれませんがヤングケアラーときょうだいの関係について改めて考えさせられました
・「子ども若者の声を聞く」大事なのに十分でなかったことが回復されて、幾重にも注意を払われたりし始めている様子を教えていただきました。力になります。

・若者の行動を声として受けとめる。行動に対して注意する必要性と、なぜそのような行動をするのか。のがさず、流さず受けとめる必要性と重要性を学ばせていただきました。

第12回

・中高生や若者自らがケアラーと気づくことは難しいと思うので、周りの支援者や関係のある人々がアンテナを張って、気づいていく仕組みがまずは必要なのかなと思います。

・経済的なプランの話をやや強調されていましたが、自身がケアラーだった当時に感じられた不安や焦燥感などが、現在の暮らしの中でも消えることがなく残っているということなのだなと感じました。

第13回

・子ども・若者ケアラーと言うのは、長い期間ケアに関わることで問題が生じているといつの間にか捉えていましたが、期間の長さ・短さに関係なくその時点での問題、将来にかかわる問題、気持ちの問題等が生じるものだと気づかされました。

・イギリスでは、家族も送迎などして、ここも日本と違うな、家で抱え込まないようになっているのかもしれないなと思いました。日本は介護というと家族で抱え込んで、重くて暗いイメージが付きまとう面もあるが、それはいきなりケアを経験するからではないかと思います。小さい頃からケアはこういうもので、いろんな人に頼っていいんだよと発信していれば、受け止め方も違ってくるのではと感じました。

拡大版ミーティング（国際シンポジウム）

<2月25日>

・啓発パンフレットを手取る相手に合わせた目線から作られているところがとても良いと思います。ライフコースごとに焦点があたっているので、対象となる子ども・若者も現在地を確認しやすいし、時期が来たら家を離れて自分の人生を歩むことを選択することも可能で、そのことへの罪悪感も軽減し、将来の希望につながるパンフレットだと思いました。

ラー) 両サイドからの支援、ファミリー単位での支援の大切さも再認識致しました。

・私も漠然とヤングケアラー、きょうだい児についての研究と支援をしたいと思いつつも、当事者経験に基づくそのような活動は私見が入ってよくないのかな、とも思っていました。しかし、認識が広まらないと制度や支援体制、法が整わないとのことから、まずはこの場合当事者経験者が声をあげて動くことがいまの日本では必要なのだと考えることができました。

・ご自身の人生経験を土台に据えて、社会の見えないけれども見落としてはいけない問題に光を当てて活動重ねておられるように感じます。国勢調査（親からの回答）とBBC調査（自己認識 子ども自身の回答）との数値の差も世の中の盲点を見える化した内容だと思いましたし、年齢別ケアにかける負担を時間数/週で表したのも社会に向けてわかりやすい数値化だと思いました。質疑応答で、医療・ソーシャルの範囲だったものが、教育機関（教育の現場）で「ヤングケアラーを発見する責任」を認識した時点が転換点の一つであったとのことのお話が日本においても重要なポイントだと感じました。アセスメント評価によりそれに対するケアが受けられること（介護認定からのケアマネージャーを中心に介護計画が立てられていくイメージ）やケアを受ける側（親だったり障がい者だったり兄弟だったり）・ケアする側（子ども・若者ケアラー）両サイドからの支援、ファミリー単位での支援の大切さも再認識致しました。

<3月4日>

・イギリスのシェフィールドでの取り組みは、全てが進んでいて、あんぐり口が開く感じがしました。特に、当事者が発見されるためのシステムや啓発なども、ちゃんとキーパーソンが存在しているなど凄いなと思いました。また、継続的な支援のプログラムも確立され、当事者が語り、活動する際の同意書などにも感心しました。ちゃんと守られている、ということはとても大切です。日本の方お二人の発表に、その日本の遅れというか、プロセスの未熟さが影響してしまっているのかなと感じました。けれども、YCARPの活動が当事者自身によって運営されていることが、何よりの原動力になっていくのだと思います。

2日にわたって大変貴重な機会を頂き、ありがとうございました。

・Salaさんのケアラーに対する基本姿勢が「ケアラーの声を聴き、ケアラーを尊重すること」に一貫していると感じました。講演の内容も自分が支援しているというニュアンスは感じられず、ケアラー当事者の声を聴き、発信することなどケアラーの存在を大切に、その姿勢がケアラーの自信や自分らしく生きる選択を可能にしていると感じ、本当にすば

らしいと感じました。Salaさんの姿勢をお手本にしたいと思います。

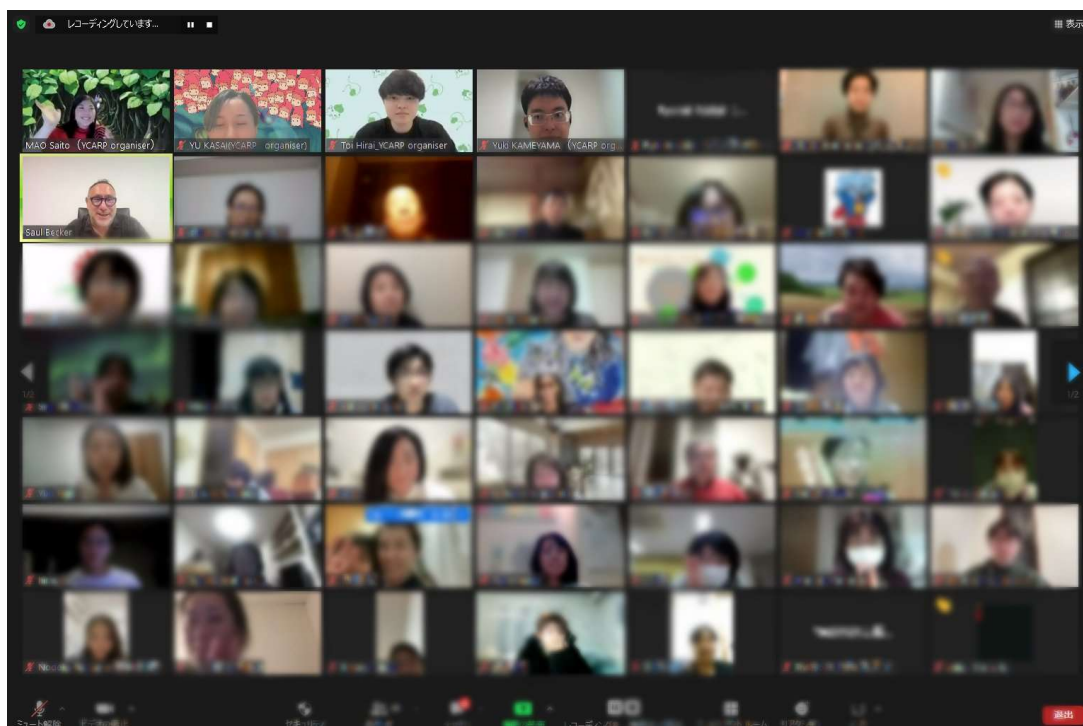
・ヤングケアラー支援における当事者こそ、プロフェッショナル（エキスパート）という言葉がとても印象的でした。ピアサポーターの方々と関連専門職がどのように協働できるのかが問われていると感じます。河西さんのお話にあった当事者の方々の疲弊については、とても考えさせられました。私も当事者の方々をゲストスピーカーとしてお招きしたいと考えていたので、敬意を忘れずに相談させていただこうと思いました。

・ケアラーへの支援の中で、メディア対応をされていることについて、どのようなことをされているのか、もう少し聞きたかったです。あと「自分が選んだわけではないのに、プレッシャーや責任が大きすぎです」という言葉に胸が痛みました。ただ「支援を受ける側」としての見方に違和感があったのですが、それに対して本当に望んでいるのか？と

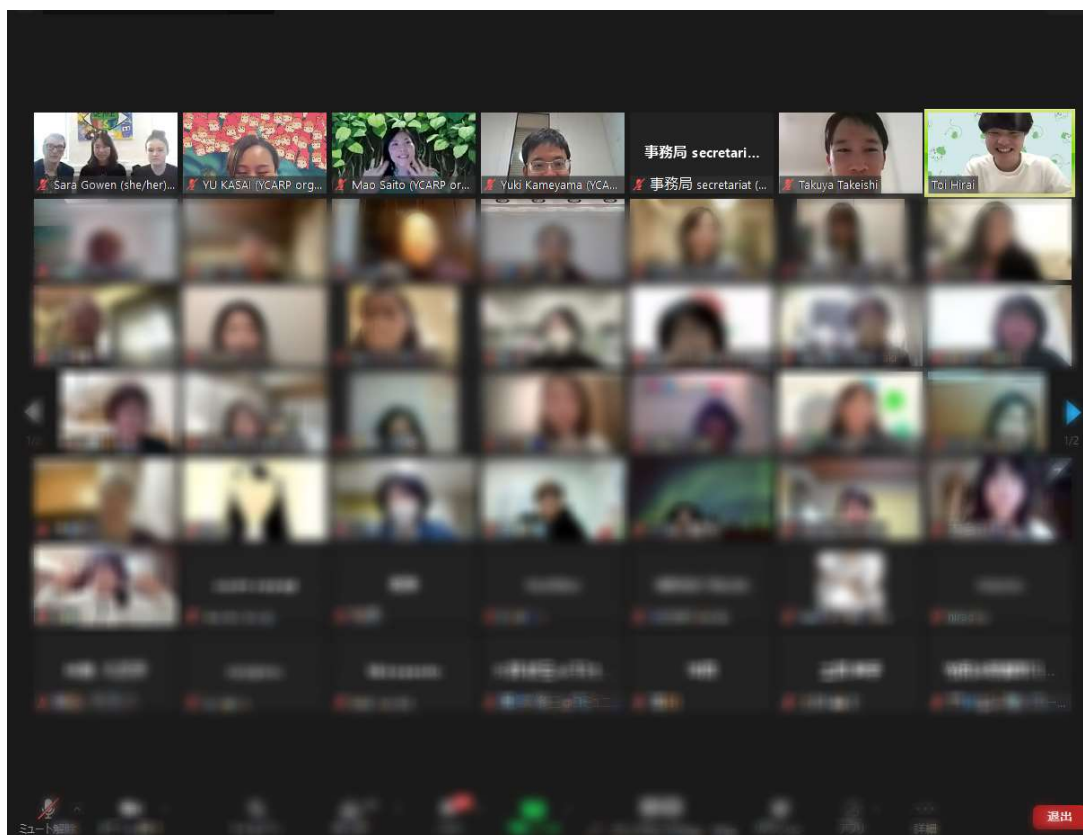
いってくださった当事者の皆さんの言葉に共感することができました。

また望んでないのに支援を受ける等、そういうことが過去にあって「支援につながりたくない方がいる」という中で、国は重層的支援体制整備事業や精神障害にも対応した地域包括ケアシステムなど、切れ目のない支援等を求めています。本当に本人が求めているのか？困っているのは支援者？近所の人？？？・・・あらためて今回の皆様のお話を例に、ケース会議があったときに「支援ありき」ではなく「本人は何を求めているのか？」を考えていきたいと思いました。

○補足資料（国際シンポジウムの様子）



2月25日の記念写真



3月4日の記念写真

当事者ととともに考える 子ども・若者ケアラー支援のための専門職養成講座

○実施日時・実施形態・実施場所

- 1日目 11月12日(土) 対面・オンライン・立命館大学朱雀キャンパス
- 2日目 11月13日(日) 対面・オンライン・立命館大学朱雀キャンパス
- 3日目 12月17日(土) 対面・オンライン・立命館大学朱雀キャンパス
- 4日目 12月18日(日) 対面・オンライン・立命館大学朱雀キャンパス

○参加者・参加人数

- 講師 8人
- 受講者 11人
- 当事者(コメンテーター) 5人
- 事務局スタッフ(学生アルバイト含む) 5人

○事業内容

すべての日程において、講座のあとに当事者と支援者を交えたグループにわかれて各テーマに基づくワークショップを行った。

〈1日目〉

- ・日本財団からのごあいさつ
- ・「なぜ子ども・若者ケアラーなのか」(斎藤真緒氏)
- ・「逆境の中にある子ども・若者に対する相談支援の基礎理念」(井出智博氏)
- ・ワークショップ①(自己紹介、現場でのヤングケアラーをめぐる課題の共有)

〈2日目〉

- ・「学校と地域の居場所から見える子ども・若者ケアラー」(幸重忠孝氏)
- ・「精神保健福祉におけるケアラー支援」(知名純子氏)
- ・ワークショップ②(学校を起点としたケアラー発見・支援をめぐる課題)

〈3日目〉

- ・「家庭医療・在宅医療から考える、子ども、きょうだい、家族の支援」(高橋昭彦氏)
- ・「きょうだいという立場から考える家族ケア」(松本理沙氏)
- ・ワークショップ③(家族まるごと支援をめぐる課題)

〈4日目〉

- ・『改めて子ども・若者の「権利」を考える』(國本依伸氏)
- ・「多機関・多職種連携での子ども・若者ケアラー支援」(橋本達昌氏)
- ・ワークショップ④(全体総括—支援者ネットワークの構築)
- ・修了式、閉会式

○参加者の感想

〈1日目〉

- ・ケアラー当事者の方たちの経験の話に、語ることで自分が楽になると思っていたので、そうではないことが沢山あることに衝撃を受けました。
- ・障害者支援をしているので、家族を頼らざるを得ない現実もあります。その中で家族だからにならない支援を考えていきたいと思いました。家族の絆より、小学校からケアについて、伝えいける社会になると当事者になった時、社会につながる可能性は広がるのではと感じました
- ・権利の保障という視点を取り入れた支援、肯定的な将来展望を描けるような支援を心がけたいと思います。
- 自分がどのような視点で人と関わっているか、勝手な自分の価値観を押し付けていないか、支援が必要な人の懐に入れるような支援をしたいと思います。
- ・質問の時間をもう少し欲しかった(先生の生の声を聞いたのがよかった)

- ・環境への働きかけや当事者中心を考える内容でした
- ・あらためて子どもの権利保障、人の権利保障の視点を意識した支援をしたいと思います。

〈2日目〉

- ・子ども達に学校と家庭以外の居場所があることを再認識しました。
- ・学校とつながりを持つことは大切だと思いますが、学校はある意味閉鎖的で、対外的な関係性を持つことに消極的です。生活クラブで子ども向け食育講座をつくって、小学校で食育の時間を持たせてもらっているのですが（まだ2校だけですが）、食という視点から学校と関係性をもって、地域のコミュニティ食堂などとのつながりなどにつなげていかないかなど、講座を聞きながら考えました。
- ・精神福祉におけるケアラー支援というより、ケアラーというだけではない心身の困り感に医療がいかに参入されているか、とてもよくわかりました。特に家族教室は私は興味深く、デイケアナイトケアの話がもう少し聞きたかったです。思春期の事例も同様に聞きたかったです。
- ・支える家族には家族独特の辛さがあり、誰と比べられるものではないという視点を持って、関わりたいと思います。
- ・二日間の講義を通して、子ども・若者が相談したいと思える「大人」に一人で在れるよう、支援に関わらず、目の前の人のお話をしっかり聴き・非言語を受け取れるよう、力をつけていきたいと思いました。

〈3日目〉

- ・とても専門的な分野の話なのに、全ての人に通じる暖かみのある取り組みと先生のお話に感動しっぱなしでした。ありがとうございました。
- ・「手作りの帽子」が高橋先生を取り巻く支援者の方々の愛が伝わってきます。誰もが笑顔になる帽子がステキです。
- ・重度の病気や障がいを抱えた人を健常者と区別しすぎた社会がどう接したらいいかをわからなくて避けたりする意識を生み出してきた。教育の現場や地域で当たり前になる機会をつくっていくことからしかインクルーシブな社会は来ないのかも知れないなと考えさせられました。
- ・きょうだい会の存在を知れたことが大きく、自分自身も実兄、義妹の病気のことを抱えていながら、どうするんだろう...という不安が薄まった気がする。このように公的支援や制度だけでなく、自主的な繋がりや会の情報が届けられるといいし、無ければ自ら作ればいいのだなと思った。
- ・親御さんの立場、きょうだいの立場、いろんな角度からのお話に寄り添える余裕と平常・普段からニュートラルで目の前の人に接していきたいと思いました。
- ・これから子育て支援事業の現場に入るので対個人を意識した関わりをより現場で実践していきたいと思った。

〈4日目〉

- ・ぼんやりしていた人権、権利に対してわかりやすく話して頂いて、まだまだ聞きたいほどでした。もう一度、しっかり子ども権利や憲法に目を通していこうと思いました。
- ・学校を作り上げていく教員としては(その意識があります)対教員、保護者、生徒に対して「こどもの人権、権利」についてはいつも意識したり、この言葉に立ち止まったりしています。日々の言葉(コミュニケーション)の中だけでなく、学校のシステムを少しずつでも変化させるよう、諦めたくないなと思いました。
- ・橋本さんの熱量にパワーをもらいました。必要な支援を作り上げていく力強さはすごいと思いました。令和6年4月の親子を受け入れることのできる施設の開設に期待しています。
- ・家族の中に加害者被害者を作らず家族まるごとの支援を心掛けたいと思います。
- ・子どもの持つ困り事が多種多様で様々な知識を持ちアンテナを張り巡らせることを意識したいと思います。

○補足資料（写真等）



当日の様子

「子ども・若者ケアラーにとってのこれから ～キャリア・住まい・人間関係etc.～」 (事業項目：ケアラー向け就活支援セミナー)

○実施日時・実施形態・実施場所

2023年1月28日(土) 11～15時、オンライン (zoom)

○参加者・参加人数

<第1部>

10代後半～30代の子ども・若者ケアラー(元)当事者9名

<第2部>

10代後半～50代の子ども・若者ケアラー(元)当事者11名

○事業内容

<第1部>

- 就活セミナー (株式会社StroboLights代表 羽田啓一郎さん)
「就職活動における、ヤングケアラーの経験の活かし方」

<第2部>

- ケアラー当事者の経験談 (高岡里衣さん)
「ケアか自分の人生か、迷ったときに考えること」

●フリートーク

- ・実家をでること
(一人暮らしにより自分の時間がもてること、家族にケアのしわよせがいくことや後悔、一人暮らしをしても家族に思考がひっぱられること)
- ・ケアレスマンモデルの社会&ケアラーフレンドリーでない企業
(介護休暇の使いにくさ、ケアラー自身のメンタルヘルス問題との関連)
- ・就活での自己PRについて

⇒当初の対象者は10代～20代だったが、30代以上の元ケアラーも参加した。今回の企画により、多様な年代のケアラーがキャリアについて話し合うことで、現ケアラーが元ケアラーから就職や仕事に関する実践的なアドバイスを得たり、人生設計におけるヒントを得たりする機会となりうるようになった。

⇒運営側としては、グランドルールの確認をするとともに、参加者が仕事や就職に限らず多様な側面からキャリアについて話せるように配慮した。

○参加者の感想

●イベントの感想

<第1部>

- ・ケアの経験を素直に企業の経験を伝えても問題ないと仰ったのは、現役の方に勇気づけられると思います。
- ・ヤングケアラーならではの企業の選び方を知れて良かったです。
- ・就活の進め方や流れを、家庭でケアを担う学生の視点を含めて語ってくださりとても勉強になりました。また、転職についてのお話も始めて伺い、学びになりました。ありがとうございました。

<第2部>

- ・高岡里衣さんのお話は、身体障害者の家族のケア特有の大変さ、特に身体介護のために要介護者のそばにいなければならない時間の長さについて知ることができたので、そういう状況に対するサポートについて考える上で、とても参考になる内容でした。精神障害者のケアとの違いは、ケアラーのメンタルへの影響の仕方のように感じました。精神障害者はケアラーに対して攻撃的な言動が多く、長期的にその環境に置かれることで、スケジューリング的なものより思考そのものが、自分を後まわしにしてしまう傾向が、より強くなってしまっているように感じました。その点を踏まえてフォローの仕方を考えていく必要性を感じました。いづれにしても、人生のターニングポイントの内、特に重要な就活の時期の手厚いサポートは、その後の人生に多大な影響があると思います。その一歩手前の時期

に、ケアラー自身や周りの人に、ケアラー本人の人生について考える機会を設ける仕組みがあると良いのではないのでしょうか。社会にも、高齢者の介護者やヤングケアラーだけでなく、見落としされがちな20代~40代くらいのケアラーに優しい社会の必要性を、広く啓発していかなければいけないと強く感じました。

●今後、YCARPでイベントを開催するにあたり、「こんな企画があればいいな」という希望があれば、教えてください。

・発達障害のある大卒の人で、会社に働いている人との交流。

・今回の高岡里衣さんのお話や、第12回のミーティングの朝田健太さんのお話を聞いて、高岡さんや朝田さんをロールモデルにして、他の各年代のケアラーの経験も加味した、ケアラー自身の、人生とケアの両立のための、人生設計チャートみたいなものが作れると役に立つのではないかな、と思ったのですがいかがでしょうか。作っていく中で、足りないものや必要なものがみつかったり、後にケアラーひとりひとりのサポート計画を作るのに利用できないかな、と勝手に考えてみたのですが.....

イギリス視察（事業項目：海外視察研修） Sheffield Young Carers (Sara Gowen氏らスタッフ) とのミーティング

○実施日時・実施形態・実施場所

2023年2月14日（火）、対面、シェフィールドのSheffield Young Carersのオフィスにて

○参加者・参加人数

- ・ Sara Gowen氏（Sheffield Young Carers, Managing Director）
- ・ Sheffield Young Carersスタッフ3名
- ・ YCARP事務局スタッフ4名
- ・ YCARPサポーター2名
- ・ 通訳者1名

○ヒアリング内容

Sheffield Young Carersの活動について

- ・ Whole family approachを通してヤングケアラーやその家族への支援、当事者の声の発信、学校との連携を通じたヤングケアラーの発見などを行っている
- ・ サポートの期間は1年間と決まっている中で1年間のゴールは人それぞれである。
- ・ 1on1にフォーカスを当てた活動を行なっているため支援は年間200人が限界で支援の質を落とさないために支援を行う人数とのバランスは気をつけている

大切にしていること

- ・ 子どもたちは子どもたちの人生の権利があり、その環境を整えていくことが大事だということをとにかく強調して伝えている。また、イベントなどでは『子どもの権利』『子どもの経験』を第一にして、子どもたち抜きではなく、子どもを真ん中に置いて進めている。
- ・ ヤングケアラーという言葉は子どもたち本人にはヒットしないため（自身の置かれている状況がヤングケアラーに当てはまるという認識が難しい）、『あなたは誰かのお世話をしていますか？』という緩い表現でチラシなどを作っている。
- ・ 見えていない、見えない子どもたちを探し続けている

子どもの発見→支援について

- ・ イギリスでは法律でヤングケアラーへの支援が明記されている
- ・ 早期発見を通してヤングケアラーの長期化を防止するために医者やソーシャルワーカーへの働きかけを行なっている
- ・ 学校はヤングケアラー支援において重要な機関であり、実際に多くのヤングケアラーが学校を通して発見されている。スティグマを軽減する活動も行なっている。
- ・ 当事者とつながったらまず面談を通してアセスメントする。その後ヤングケアラーの家庭訪問を行う。その面談の中でSheffield Young Carersの活動内容や受けることができるサポートなどについて説明を行う。最初の面談の時は話をする環境や当事者の気持ちに特に注意をする。
- ・ 家庭訪問時に家族がOKを出したら1on1での関係のビルドアップを進めていく

アセスメントについて

- ・ アセスメントシートは常に使うわけではなく、できる時のみで、アセスメントシートをうまく活用できている地域もあればうまく活用できていない地域もある。Sheffield Young Carersはアセスメントシートができる前から活動を行なっていたため活動にアセスメントシートが必ずしも合うとは限らない。全てのヤングケアラーがアセスメントを受けているという訳ではなく、ヤングケアラーだと思ったらサポートを行っている。
- ・ 法律があっても実践が乖離してしまっているというのも現実であり、イギリスのヤングケアラー支援の大きな課題である。アセスメントがうまく行っていない大きな理由の1つに『誰に何を提供する？届ける？』といったガイダンスがないことがある。ガ

イダンスがないためそれぞれの立場にいる人が何をすれば良いか分かりづらいという状況が起きている。

被支援者からボランティアスタッフになった21歳Aさんの話

- ・現役ケアラーで11歳から21歳（現在）までケアを行っている
- ・はじめは自身がヤングケアラーであるということを認識しておらず、住んでいた地域も少し離れていたためSheffield Young Carersのサポートを受けていなかったが、学校でヤングケアラーとして発見してもらったことがきっかけでSheffield Young Carersを紹介してもらった。
- ・それ以前に受けていたサポートとSheffield Young Carersで受けることができたサポートは大きく違った。以前受けていたサポートはレスパイト支援であったが、Sheffield Young Carersのサポートは状況改善まで考えられた手厚い1on1の支援であった。1on1を通して自分の未来について一緒に考えてくれて一緒に考えてくれて大学進学をサポートも行ってくれた。また、学校ではなかった他のヤングケアラーとの交流を通して自分は1人ではないということを知ることができた。
- ・現在はSheffield Young Carersのボランティアスタッフとして活動している。

Aさんはなぜボランティアスタッフとして活動している？

- ・Sheffield Young Carersが好きということはもちろん、ヤングケアラー支援の必要性や当事者へのサポートを行いたいからずっと活動を続けている。

組織にとってAさんの存在はどんな意味をもつ？

- ・組織にとってAさんのような存在はとても重要であり、意思決定するとき当事者であるAさんのような存在の人に確認することができる。Aさんの他にもAさんのようなスタッフが3人いる。

プライバシーの保護はどうしてる？

- ・子どもたちをサポートすることを1番大事にしている。講演は話せる状況の子ども以外話さない、当日に子どもたちが講演に出たくないと言ったら当日でもサポートをする。その子どもは前日に家族と何かあったかもしれない。その子を1番尊重している。また、講演が終わった後のサポートも丁寧に行っている。
- ・「話すことで周りの人が状況を知ることになるかもしれない」など話すことのメリット・デメリットを伝えている。
- ・親への許可はWhole family approachだから当たり前にとっている

○参加者の感想（平井）

- ・Sheffield Young Carersのみなさんが『権利ベース』で話をしていたことがとても印象的であった。日本ではヤングケアラーについて語られるときに『ケアをしていることが問題』という見られ方をしたり、当事者抜きでヤングケアラー支援について考えられたりしているが、Sheffield Young Carersは当事者を真ん中に、権利を守ることを大切に、子どもたちのことは子どもたちが決めるということを徹底しており、その姿勢は日本のヤングケアラー支援を考えていく動きの中でも必ず必要になるポイントであると感じた。2023年4月に子ども家庭庁が発足し当事者の声が以前よりも重要視されると考えられるが、形式的なものにならないような仕組みが必要であると感じる。
- ・イギリスのヤングケアラー支援や研究を見的过程中で、法律でヤングケアラーについて明記されている、実際に支援団体が200~300ある、というところからも日本よりも何段階も進んでいることがわかるが、法律と実践の乖離があったり、当事者を発見する仕組みが必要ということが言及されていたり、課題の粒度や現状は大きく違うが似た課題感を持っているということが面白いなと感じたと同時に、文化も現状も大きく違うイギリスのヤングケアラー支援を日本にそのまま持ってくるということは難しいと感じた。Whole family approachが進んでいるイギリスと日本の間には大きな差があり、Whole family approachや社会資源が豊富にあることを前提とした課題感や言及もあつたため、優先順位を考えながら支援を構築していく必要性を感じた。

○補足資料（写真等）



スタッフへのプレゼンの様子



スタッフとの集合写真

イギリス視察（事業項目：海外視察研修） Sheffield Young Carersの親たちとのミーティング

○実施日時・実施形態・実施場所

2023年2月15日（水）、対面、Sheffield Young Carersのオフィスにて

○参加者・参加人数

- ・ Sara Gowen氏（Sheffield Young Carers）
- ・ Helen氏（Sheffield Young Carers）
- ・ Daniel氏（Sheffield Young Carers）
- ・ Sheffield Young Carersの親たち2名
- ・ YCARP事務局スタッフ4名
- ・ YCARPサポーター2名
- ・ 通訳者1名

○ヒアリング内容（質疑応答・意見交換）

【斎藤】日本では、ヤングケアラーを発見すると、親がどうかしなさいと言われる。子どもや親はヤングケアラーであると言えない。

【Sara】イギリスでも同じようなケースはある。支援が進むうちに、子どもが離されることを懸念して支援がストップすることがある。家族・親族と関係を深めて、彼らみんなが承認されていることを伝えることが大事。最初に会うときはみんな警戒しているので最善の準備をする。どんなサポートが必要か、3ヶ月の間に12回のセッションを通じてみんなで探していく。メインは親と面談をする。医療とのアクセス、経済面、家の改修など。親向けのシートを使って探っていく。

【親A】障害のある親にとっても、子どもがヤングケアラーということが恥ずかしいと思わない環境を作ってもらうことが重要。子どもたち自身が話しても大丈夫かもしれないと思ったら支援と繋がれる。両親が自ら支援と繋がれば、子どもが何かをしなくても支援に繋がれる。

【山村・斎藤】日本では、親の障害を学校に伝えても、学校が何をすればよいか分からず、支援につながらない。18歳を過ぎたら支援されない。個人の支援はあるが、家族まるごとの支援は少ない。

【山村】Whole family approachを実践する人はどのようなバックグラウンドがあるか。

【Helen】資格は重要でない。全ての経験が活かしている。これをやりたいという気持ちが大切。

【Sara】単に問題を解決するというよりも、寄り添い、強みに変える。

【斎藤】多機関連携はどうなっているか。誰がイニチアチブを握っているか。個人情報共有できるのか。

【Helen】個人情報保護の法律があり、緊急でない限り、親の同意を得てからヤングケアラーを支援につなぐ。GP、クリニック、学校など複数の機関につながる。専門職が定期的なミーティングを行う。そこに親も入る。18歳未満のヤングケアラーも入る必要があれば入る。（イニチアチブについては回答なし）

【親B】ソーシャルワーカーと関係がよくなく、子どもが連れて行かれようとしたことが嫌だった。Helenが守ってくれた。

【佐野】親としてミーティングに参加してよかった、安心できたことをお聞きしたい。

【親B】ミーティングに参加できると自分の意見が言える。参加がしんどい場合もあり、もし参加できなかったらHelenを通じて意見を伝える。

【親A】親の声と子どもの声が両方聴かれることが重要。それをつなげてくれるのがHelen。親を疎外して話が進むことには子どもが引き離される恐怖があり、それによって起こる問題は大きい。

【平井】学校にヤングケアラー担当者を置くことについて、ほかの問題との優先順位をどう考えるのか。

【Sara】パンデミックによってケアラーが増え、支援しなければならないというキャンペーンがあった。学校では特別なニーズを持つ子どもへの支援があるが、ヤングケアラーに対しては支援がなかったため、ヤングケアラーを認識させようということ。

【Sara】問題解決の見通しが出てきたら2つのグループを紹介するが、そのうち1つは、同じような状態の家族と繋がるグループである。もう1つは、親のニードを踏まえたプログラム。例えばカレッジでセラピーやマッサージなどの職業上のスキルを身につける。

【親B】それによって自信もつく。裁判所で働いた、加害者側の支援をした。Helenが寄り添ってくれたからできた

【親A】アロマやハーブティーを使ったセラピーを企画した。自信になった。

【斎藤】親が個人として社会に貢献できる、強みを持つことができることは良い。

【Sara】繋がりがずっとあることで安心できる。自信をもって生活することを目指せるのがこの繋がりで。

【Daniel】自分は、Helenの3か月のセッションが終わった後に、自信をつけたり就業したいなどの役割をしている。イギリスではボランティアへの参加が仕事につながる。

【親A】息子が学校を卒業した後、助けられた。自分ができないことを支援してくれた。

【佐野】父親の支援はどうなっているのか？

【Sara】現在、父親もグループに入っているが、ナーバスで不安がある。以前、男性のグループができたときは、男性の支援団体に紹介した。イギリスでも男性が助けを求めることは難しい。男性はsolution-drivenで、女性グループの志向と合わない。

【斎藤】ヤングケアラーについてジェンダー差はあるか。

【Sara】8-12歳のヤングケアラーは男女が同じくらいいるが、12歳を超えると女の子の割合が増える。男の子は口数が減って、問題を抱えていることを話さなくなる。

○参加者の感想（亀山）

・Sheffield Young Carersでは、家族同士のピアサポートグループや、ボランティアを通じて親に自信をもたせるといったプログラムを行っている。家族のエンパワメントによってヤングケアラーの負担を軽減できるという点で、大きな意味のある取り組みである。

・ヤングケアラーの家族にアプローチする際、親は子どもが引き離されることを恐れる場合がある。それに対しては、ワーカーの働きかけや、親の声を聴くことが必要である。

・子どもがヤングケアラーとして認識されているとしても、自信をもって声を発する親たちの姿に感銘を受けた。日本では、家族の責任が強調され、親が非難される風潮があるが、それでは親や子を委縮させ、さらに弱い状況に追い込むことにしかならないと思う。

○補足資料（写真等）



Sheffield Young Carersの親たちとの記念写真

イギリス視察（事業項目：海外視察研修） Sheffield Young Carers アクショングループ 交流

○実施日時・実施形態・実施場所

2023/2/15(水)、対面、シェフィールドにて

○参加者・参加人数

- ・ Sara Gowen氏（Sheffield Young Carers, Managing Director）
- ・ Sheffield Young Carersスタッフ3名
- ・ Sheffield Young Carersアクショングループメンバー8名
- ・ YCARP事務局スタッフ4名
- ・ YCARPサポーター2名
- ・ 通訳者2名

○交流内容

- YCARPの活動紹介
- Sheffield Young Carersアクショングループの活動紹介&質疑応答
- レクリエーション

YCARPの活動紹介

YCARPを代表して河西が英語でYCARPについてのプレゼンを行った。
日本においてヤングケアラーが注目された背景、調査結果、ヤングケアラー支援に関する社会の動き、イギリスとの差について紹介した後、当事者視点から感じる社会やメディアの動きや報道の仕方、若者ケアラーへの支援不足などの疑問・課題感について紹介した。その情報をもとにYCARPの2022年度の活動紹介を行った。

Sheffield Young Carersアクショングループの活動紹介&質疑応答

Sheffield Young Carers アクショングループを代表して2名の当事者（14歳）が活動紹介を行った。

・ Sheffield Young Carersのアクショングループとは？

- ・ Sheffield Young Carersのサポートを受けた経験があり（もしくは現在受けている）、組織の運営や他の当事者へのサポート、社会発信に関心がある活動したい10歳～の子どもたちからなるグループ。
- ・ 当日参加していたアクショングループに所属する8名のヤングケアラー当事者の中には10歳の当事者が2人いた
- ・ アクショングループへの参加申し込み後、研修を受け、その後2年間をベースに活動を行う。
- ・ 1年目はグループの一員として活動を行い、2年目は必要に応じてリーダーやメンターの役割を担い、新たにつながるヤングケアラー当事者へのサポートを行うこともある。
- ・ 国会議員や市議会議員への提言なども行う。
- ・ 首相との会談も行った。
- ・ 動画や記事で当事者の声を届けることもある。
- ・ 様々な場所で当事者の声を発信するグループ。

【質疑応答】

○発信を行うことで現在だけでなく将来、発信したことで不利益を被る可能性や発信することで家族との関係性が悪化する可能性もある中でどのような対応をとっているのか？

Sheffield Young Carersのサポートは基本的にWhole family approach であり、アクショングループに参加する当事者はSheffield Young Carersのサポートを受けた経験がある（もしくは現在受けている）ため、前提としてアクショングループに所属する当事者

の親との関係性が構築されている。もちろん当事者に「周りの人たちに自身の状況に知られる可能性」などの考えられるデメリットを伝えること・親への許可を取ることを行っており、実際に参加者の一名の当事者は親からの要望により写真撮影の際は写真に映らない場所へ移動し、写真に映り込まないような対策を講じていた。

○なぜアクショングループで活動を行なっているのか？

- ・自身と同じような経験をしているヤングケアラーのみんなの役に立ちたい
 - ・多くの人にヤングケアラーについてもっと知ってほしい
 - ・自分自身が人の役に立てることが嬉しい
 - ・自分がSheffield Young Carersにお世話になって感謝しているから
- などが活動のモチベーションという声があった。

レクリエーション

アクショングループのヤングケアラーたち、Sheffield Young Carersのスタッフたちとイギリスのレクリエーションゲーム2種を行った。

○参加者の感想（平井）

- ・現在日本で『ヤングケアラーの声』として上がっているのはほとんどが『ヤング』という視点で見た時に『元ヤング』の声である中で、10歳～18歳の現役のヤングケアラーたちが顔出し、名前出しで声を上げているということが衝撃的であった。
- ・アクショングループに参加する子どもたちが安心して声を上げられる背景にはWhole family approachを通して築かれた家族全体との関係性や必ず親の同意をとったり子どもにメリットデメリットを伝えたりするなどのプライバシーの保護を行っていたりといった様々な理由があり、日本でも当事者の声が届く社会を実現をしていくためにアクショングループのような仕組みを作っていく必要があると感じた。
- ・アクショングループは基本的に2年間の活動ということで『声の代表性』の問題の面でもかなり参考になるのではないかと考えた。ヤングケアラー当事者の中には声を上げたい人がいれば声を上げたくない人、上げたいけど上げられる状況にない人、そもそも声を上げたいか上げたくないかを考える余裕もない人、がいる中で声を上げたい人の声ばかりが取り上げられてしまったり、声を上げる当事者が当事者の代表に見えてしまうという苦しさによって声を上げた当事者が苦痛を感じたりすることについての言及があったりする中で、期限があることは解の1つになる可能性があるのではないかと考えた。
- ・アクショングループの存在以前にヤングケアラー問題に限らず『当事者の権利（声）を大切にす社会』があるからこそアクショングループが持つ意味がより大きくなっているということを感じた。日本でも『当事者の声が大切にされる』社会になってほしいと思う。

○補足資料（写真等）



アクショングループ&Sheffield市長との記念写真



アクショングループと

イギリス視察（事業項目：海外視察研修） Paul Blomfield氏とのミーティング

○実施日時・実施形態・実施場所

2023年2月15日（水）、対面、シェフィールドにて

○参加者・参加人数

- ・ Paul Blomfield氏（The Labour MP for Sheffield Central）
- ・ Sara Gowen氏（Sheffield Young Carers, Managing Director）
- ・ YCARP事務局スタッフ4名
- ・ YCARPサポーター2名
- ・ 通訳者2名

○ヒアリング内容

【Paul】 ヤングケアラーの問題に取り組み始めたきっかけ

自分自身はケアラーとしての経験はないが、Saraたちヤングケアラーのグループに刺激を受けた。

【Paul】 重要だと感じていること

- ・ 出会う子どもたちは全体のごく一部。学校や医療も含めて社会が子どもたちを早い段階で見つけられる姿勢、仕組みをつくるのが今後一番重要になっている。
- ・ 特に学校での発見に重点をおいているが、課題が沢山ある。今は、学校におけるリーダーをたててその人がヤングケアラーをサポートする仕組みをつくらうとしている。
- ・ 全体の決めごとというわけではなく、個人一人ひとりに質の良いサービスが届くようになることを重要視している。
- ・ 実現したいプランは、ヤングケアラーについて他のヤングケアラーでない子どもたちと同じチャンスや平等な条件で成長していけるパッケージをつくること。

【Paul】 具体的なこれまでの取り組みについて

- ・ 数年前から議会でヤングケアラーについての議論ができるようになった。ヤングケアラーの問題に取り組む超党派のグループをつくった。メンバーの一人は元ヤングケアラーの人だった。このグループを公にしたいと感じるようになったが、議会としてはヤングケアラーの問題だけに取り組むわけではないところが難しい。自分の取り組みの目的は、ヤングケアラー・ケアラーについて議会に対してプレッシャーを与えていくことにある。
- ・ 4年前にヤングケアラーの子どもたちと一緒にメイ元首相に面会にいき、ヤングケアラーについて30分間の意見交換をした。子どもたちはクリアに自分たちのいうべきことをはっきりいっていたので、Saraや自分がいうよりも説得力があったと感じた。
- ・ ヤングケアラーアクションデーにzoomで参加し、国会議事堂と中継をした。
- ・ 労働党は、当事者の生の声を決定権のある場で発信してもらうことに力をいれている。最近子どもたちを支援するためのある会議に参加したが、決定権のある人に子どもたちの声を直接伝えることによって、事はすごくスムーズに進んだ。
- ・ 労働党には決定権はないが発言権はある。決定権のある人と影響力のある人の双方がヤングケアラーについて話をする機会をもてた。また、双方がヤングケアラー当事者との面会を果たした。
- ・ 成功した部分としては、議会で「教育の分野においてヤングケアラーがどういう状態にあるか？」という質問ができたこと。
- ・ イギリスでさえ今やっと成果がみえてきたところだが、それでもまだ課題がある。

質疑応答・意見交換

【斎藤】日本はヤングケアラーについての関心が高まっているが、全世代のケアラーへの支援は存在しない。ヤングケアラーの支援のために、親が責任をもっと果たすべきだという方向に向かおうとしている。ケアラーが二つに分断されそうなことに危機感をもっている（保護が必要な子どもたち/自己責任である大人という分断）。

【Paul】イギリスのメインの取り組みはヤングケアラーにもアダルトケアラーにもサポートすること。ただ、やっぱり子どもたちのサポートについても実践していかなければならない。ヤングケアラーでもいいことがある（親と一緒に長く過ごす時間がある等）と言われることもあるが、友達と過ごす時間や成長していくための時間、メンタルヘルスの問題などがあるなかで、それらが見過ごされるのではなくサポートされるべきだ。大切なチャンスを逃すことはなくしたいという思いをもっている。

【斎藤】超党派グループでの現在のメインの争点はなにか？

【Paul】システムとして子どもたちを見つけ出し、つなげ、サポートの質をあげること。州によってサポートに格差があるが、学校を中心にサポートの質をあげたい。学習障害の子どもたちについては学校で規則があるが、ヤングケアラーについてもそれと同じだけのサポートをつくっていききたい。学校は子どもたちの実態について何も知らないということを可視化させていくことが大切だと思っている。学校には「これを守ってください」と言いたいわけではなくて、「こういうことができるよ」と言っていきたい。

【河西】当事者の子どもたちと接するとき気をつけていることはなにか？

【Sara】子どもたちは事前に質問を準備していき、Paulは聴き役として質問に答えるというかたちが基本なので、子どもたちに質問することはないかもしれない。子どもたちにとっては、議員が声をきいてくれているということがいい機会になっている。

【Paul】アクショングループと一緒に話したことを実行することについては、もちろん許可を得ている。

【河西】若者のメンタルヘルス問題とあわせて、ヤングケアラーのメンタルヘルス問題にも特に注目している？

【Paul】学校訪問をし、子どもたちに「MPとして何を伝えようか」といったときに、一番はメンタルヘルスについてといわれる。議会で話す時には、ヤングケアラーを特にメンタル面でプレッシャーがかかっている層として一例にすることが多い。

【亀山】イギリスではケアラー支援の法律があるが、日本では条例しかない。日本でもケアラー支援の法律ができたらと思っているが、そのためにはどのようなアクションが必要か？

【Paul】大切なことは国が法律をつくることと地方自治体が何をするかを決めること。国が取り決めをすることと、自治体が自分たちにあうようにアレンジメントをする、そのバランスをうまくとることが大事。それがうまくまわらなくて、ケアが行き届かない結果、センセーショナルな事件が起きてしまうこともあるがその時に声をあげることが大事。

○参加者の感想（河西）

- ・議員と市民の距離の近さを感じた。今回、イギリス視察でPaulとの面会が実現したのは、エージェントとして支援団体のSaraに入っていたことがあったが、そうしたことから支援者と政治家の距離の近さを感じる。

- ・一方、日本では政治家がヤングケアラーの当事者や関係機関と日頃から付き合うという状況はなく、政治家と市民の距離は遠い。日本では過去ヤングケアラー支援の施策に向けてプロジェクトチームでの会議が数回開かれたが、そのうち当事者が会議に参加した回数は圧倒的に少ない。選挙時にだけヤングケアラー支援を掲げる政治家が多数現れることは、パフォーマンスと読み取れても仕方がないと感じる。

- ・イギリスのような超党派の取り組みと同時に、当事者の声を届けることに力を入れている政治家とタッグを組むことが重要である。

- ・また、イギリスでも特に注目されているケアラー自身のメンタルヘルス問題については、日本でもっと注目されるべきだと感じる。

○補足資料（写真等）



Paul Blomfield氏との記念写真



Paul Blomfield氏とのミーティングの様子

イギリス視察（事業項目：海外視察研修）

The Children's SocietyスタッフのHelen Leadbitter氏とのミーティング

○実施日時・実施形態・実施場所

2023年2月16日（木）、対面、ウィンチェスターのカフェにて

○参加者・参加人数

- ・ Helen Leadbitter氏（The Children's Society）
- ・ YCARP事務局スタッフ4名
- ・ YCARPサポーター2名
- ・ 通訳者1名

○ヒアリング内容

【Helen】イギリスの状況やThe Children's Societyの取り組み

（YCARPのプレゼンについて）イギリスでもヤングケアラーを取り巻く状況は似ている。パンデミックによりヤングケアラーの責任が重くなっているし、メディアについても同様である。

Whole Family Approachの考え方で、ヤングケアラーだけでなく、ケアを必要としている人のサポートをすべき。No Wrong Doors Approachという、多機関・多職種連携で、誰がケアラーを発見しても同じように家族を支援するアプローチをする。

The Children's SocietyとCarers Trustが働きかけて法律が制定され、地方自治体がヤングケアラーのアセスメントをすることが定められた。子どものソーシャルワーカーがヤングケアラーのアセスメントをすると同時に、家族のアセスメントもする。障害のある親のケアに焦点を当てることで、ヤングケアラーの責任を減らすことが目的だ。

Carers Trust とChildren's Societyは、'Young Carers in Schools'という学校に働きかけるプログラムを全国に展開し、学校がヤングケアラーを発見するためのガイダンスをしている。'Whole Family Pathway'という、専門家（保健師、医師、ソーシャルワーカー、教員など）に向けてのWhole family approachに関するアドバイスもあり、オンラインで無料公開している。

今学期から、学校の国勢調査でヤングケアラーの部分も入った。イギリスでも、登校率、人種、地域などが調べられてきたが、それにヤングケアラーを加える。それは全国的なものなので、ヤングケアラーがどの地域で多いなどがわかる。The Children's Societyもその働きかけをしてきた。

ロックダウン中も、支援団体やヤングケアラー当事者らと連携して、どのような影響があるかを調べた。ヤングケアラーは、コロナを家に持って帰るのが怖いから学校に行かなかったり、オンラインで勉強できる環境が整っておらず勉強で遅れたりする場合がある。それで教育省の人たちとミーティングをして、ヤングケアラーへの影響を伝えた。それでヤングケアラーも学校調査に入った。つまり、学校がヤングケアラーを発見する責任を課せられることになった。

今ちょうど、Carers Trustの働きかけもあって、介護休暇に関する法律が通りそうになっている。ヤングアダルトケアラーが仕事を探すときに、ケアをしていることを言えず、職場に事情を理解されない。企業にアプレンティス（有給インターンのような職業訓練）のヤングケアラーを送ったこともある。

参考ウェブサイト

<https://youngcarersinschools.com/>

https://www.childrensociety.org.uk/sites/default/files/2020-10/whole_family_pathway_2016_1st_1_.pdf

質疑応答・意見交換

【斎藤】ヤングケアラーのための奨学金はあるのか。

【Helen】16歳以上のケアラーにはケアラズベネフィットという手当がある。ケアの負担を減らしたいはずだが、固定化させることになる。また、21時間以上働いたり学校に行ったりする人は政府からのベネフィットがもらえないため、大学に行かずにお金をもらおうと考えるケアラーもいる。21時間以上という制度上の基準があるが、ケアは時間で割り切れないものはずだ。

【亀山】日本では、ヤングケアラーの学習に遅れが出るといったときに、地方自治体はヤングケアラーにケアを続けさせて、そのうえで学習支援を提供するといった場合がある。ケアの負担を軽減する支援は多くない。イギリスではどのようにしているのか。

【Helen】2015年の法律で、ヤングケアラーの負担を減らすことが決められたが、そのためには地方自治体がソーシャルサービスを提供する必要がある。しかしソーシャルサービスには予算の限りがあり、支援を必要としている人を必ずしも支援できないという現状がある。また、ケアを必要としている人の問題にもよる。例えば、ひどい精神疾患の親のケアだったら、その方に対するかなり複雑なケアが必要。身体障害がある場合は家庭に入って手伝いをする人を送るサポートはしている。ロックダウン中は他人が家に入るのが嫌などということで、ケアパッケージが解消されてしまった。

【平井】イギリスと比較して、日本ではヤングケアラーの受け皿がない。そのなかでどのように担い手を増やすのか。

【Helen】イギリスでは、95年にウィンチェスターが初めてヤングケアラーの支援を始めた。ジェニー・フランクがウィンチェスターとアンドーヴァーでヤングケアラーへのインタビュー調査をした。障害のある親のソーシャルワーカーを通じて、ヤングケアラーがいることがわかった。学校などに調査結果を発表して訴えをしていた。それで無視できなくなった。それでジェニー・フランクがウィンチェスターヤングケアラズという団体をつくり、ヤングケアラー当事者を集めて、啓発等を始めた。それで、そのグループが学校訪問などをして、ヤングケアラーが集まるようになり、拡大していった。ジェニーらが全国のソーシャルワーカーを通してヤングケアラーを招待してカンファレンスをした。2000年、ウィンチェスターに600人のYCが集まった。それがYoung Carers Festivalの始まり。1つのイベントとしては、そこで自分の一番困っていることを書いてもらい、それを集めて、何が必要とされているかを明らかにすることなどをした。それ以来、イギリス全国で300のヤングケアラー支援団体がある。

【山村】学校における'Step by step guide'をどのように作ったか？

【Helen】実際にヤングケアラーにインタビューしてニーズ調査をした。それで、何が必要かをまとめてガイダンスを作った。詳しい経緯はウェブサイトに乗っている。10年前にできたが、見直してアップデートしている。

ガイドをつくる前にできることとして、学校にヤングケアラー担当を置く、ということがあがる。学内掲示板とかでヤングケアラーの担当がいますよ、お話しに来てくださいとアピールする。それで実際にヤングケアラーと話をしてガイドをつくる。ガイドが使われているのは全国で約1030校で、1%と非常に少ない。だから、学校国勢調査にヤングケアラーの項目を入れることに大きな意味がある。

○参加者の感想（亀山）

- ・イギリスでは、学校国勢調査にヤングケアラーの項目が入るなど、ヤングケアラーを早期発見するうえで学校が重要な場になっている。その背景としては、The Children's Societyなどヤングケアラーの声を聴いてきた支援団体の継続的な働きかけがあった。
- ・ヤングケアラーのケア負担の軽減が必要だが、一方で予算の制約があるという限界は、日本でもイギリスでも共通している。イギリスではWhole Family Approachの考え方に基づくヤングケアラー支援の法律ができており、その支援の具体化が次の課題だと理解した。
- ・YCARPが今後担っていくべき役割についても示唆を得た。現在、日本国内でヤングケアラーに直接支援を提供する団体が次々と登場しているなかで、'Step by step guide'や'Whole Family Pathway'を提供するThe Children's Societyのように、情報提供や啓発を行っていくことにも意味があると感じた。

○補足資料（写真等）



Helen Leadbitter氏との記念写真

イギリス視察（事業項目：海外視察研修）

Carers TrustスタッフのAndy McGowan氏とのミーティング

○実施日時・実施形態・実施場所

2023年2月17日（金）、対面、ロンドンのCarers Trustオフィスにて

○参加者・参加人数

- ・ Andy McGowan氏（Carers Trust、Policy & Practice Manager）
- ・ YCARP事務局スタッフ4名
- ・ YCARPサポーター2名
- ・ 通訳者1名

○ヒアリング内容

【Andy】 Carers Trustの概要

・ Carers Trustの事務所は120、子どもから大人に至るまでを対象とする。UKの85%を網羅している。シェフィールドはヤングケアラーだけを対象とするが、他の支部は大人のケアラーを対象とするところもある。

・ 地方の支部を支えるだけでなく、全国展開のキャンペーンを行うこともある。ガイドの作成等もしている（ケアラーの仕事に関する支援、ニーズアセスメント、権利に関するもの等）。

※イギリスの方針としてWhole Family Approachが採用され、法律で守られている。

【Andy】 日本の現状についてのYCARPのプレゼンに対する感想

●調査について

・ 中学と高校のヤングケアラーの割合は同程度だが、日本は高校の数が少ない。なぜか？

→【斎藤】調査が行われたのが3年前であり、多くの子どもたちがヤングケアラーを知らない。小学生・中学生・高校生で調査方法自体も違っている。自分をヤングケアラーと思いたくない子どもたちも多いのではないか。

●ヤングケアラーに対するステレオタイプな理解について

イギリスのヤングケアラーの意見と日本のヤングケアラーの意見は似ている。特にヤングケアラーに対するステレオタイプなまなざし、政治家のヤングケアラーに対する理解が表面的なものであることについて。メディアについては身体的なケアや家事といったステレオタイプな描写の問題があるが、精神的なケアについてもCarers Trustでは認知度を高めたい。

●仕事に関する問題について

現在イギリスでは法律が確立されようとしている段階。ヤングケアラーやアダルトケアラーの介護休暇をつくるもの。

●ヤングアダルトケアラーに対する支援不足について

ヤングアダルトケアラーについては支援が不足している。シェフィールドヤングケアラーズも18歳まで。他の団体は大人のケアラーだけの支援だけ。そこをどうつなぐかが課題。

●精神疾患の親をもつ子どもの支援について

Carers Trustだけでなく、Our Time（精神疾患の親をもつ子どものための支援団体）でも活動している。Our TimeでKids Timeというワークショップ（[Kids Time Workshops | Our Time](#)）を通してケアや親の病気について話せる（イギリス、スコットランド、ドイツ等）。

※ヨーロッパ全体で行われるME-WEプロジェクトとは異なる。

※Andy自身が元ヤングケアラーだった。父が心臓疾患、母が精神疾患の問題を抱えていた。精神的なサポートが一番難しかったので、そこに情熱をもっている。

●医療機関におけるヤングケアラー支援の視点のなさについて

・ヤングケアラーを発見するのは多くが学校やソーシャルワーカー。医療関係や大人のケアラー支援のなかからはあまり見つからない。5つの自治体でみると大人のメンタルヘルスサービスを通じては年間に7人しかヤングケアラーが発見されない。多くのサービスがヤングケアラー支援についての責任を有すると思っていない。昨年行った精神疾患をもつ親の子のためのウェビナーを開催した際に、イギリス中の親たちを治療している財団などすべてに案内を送ったが、ほとんどが「大人のサービスしか提供していない」と返答をして参加しなかった。

・イギリスではヤングケアラー支援は進んでいるが、他の国のほうがメンタルヘルスの親の子については進んでいる。ノルウェーやオランダでは、精神疾患をもつ親が医療機関で受診した場合、医療関係者が「子どもはいますか？」と親に対してきかないといけなく法律で定められている。イギリスでもそうした法律を定めたい。重要だけど難しい。政府は自治体に多くの役割を与えすぎることを厭う。法律と自治体とのバランスをとること。

・学校のOfsted（子どもや若者のケアに関わるサービスの監査）や病院のOfsted、そういうところから各機関がどういう働きをしているかをみてもらうというアプローチもある。薬局、養護教諭、医者など医療関係ひとつとっても色々な角度から。

・昨年「Health and Care Act」（病院から退院した時に発見しつなげる、[Health and Care Act 2022 \(legislation.gov.uk\)](https://www.legislation.gov.uk/ukpga/2022/12/1/enacted)）という法律が通過した。ヤングケアラーが法律を使えるように、効力を発揮しているか注視している。

質疑応答・意見交換

【齋藤】発見されたとしてもつなぐしくみがないが、イギリスはどうか？

【Andy】すべてのヤングケアラーが法律によりアセスメントの権利をもつが、実際にどうやってアセスメントがされるか等は地域によって異なる。今年から学校の調査にヤングケアラーという項目が設けられるようになったので、そこで見つけて学校が記録するようになってきている（ただし、発見後どうするかという義務はない）。これは1年に1度の調査。Carers TrustとThe Children's Societyが共同で学校でのサポートについてのガイドを制作している（[YCiS Guide – Young Carers in Schools](#)）。ヤングアダルトケアラーについては、UCAS（大学入試の際に応募する窓口、[UCAS | At the heart of connecting people to higher education](#)）にヤングケアラーであることを申請する項目が設けられた。大学に対してもガイドをつくらうとしている。UCASにはすでに障害がある学生、貧困家庭出身の学生、エスニックマイノリティの学生についての項目があるため。UCASにヤングケアラーの項目が追加されたことで、大学の認知度もあがってくる。大学の監査にもアプローチをしていく。これから変化がすすんでいくだろう。

【齋藤】ヤングケアラー支援はコロナの感染拡大とも関係がある？

【Andy】コロナでロックダウンになったため、ヤングケアラーが発見される数がさげられた（見えづらくなった）。国勢調査ではヤングケアラーの数が下がったが、ヤングケアラーに直接きいたレポートをみると数はあがっている（Saul Becker氏の調査）。国勢調査は親の回答による結果であるため、こうしたギャップがある。実際には14万人のヤングケアラー・ヤングアダルトケアラーが少なくとも20時間/週のケアをしている。このギャップは認知度が少ないという証明になるため、これを証拠にして政府に訴える。

【平井】国に訴えている時のポイントは？支援が必要というだけでは説得力がないのではないか。社会的な影響についてはどう考えているか。

【Andy】政府の優先順位のなかに「追いつこう」（[Levelling up, Levelling Up the United Kingdom - GOV.UK \(www.gov.uk\)](#)）という政策がある。就職や教育などのヤングケアラーの問題だけでなく、国としてメンタルヘルスの問題も大きな課題となっている（医療機関でも待機者が多い）。メンタルヘルスの問題をもつヤングケアラーにもアプローチすると、待機者の数が減る。Whole Family Approachによりヤングケアラーだけでなく、家族全体を支援することで支援が必要な人の数がさがる。ヤングケアラーを早期発見し支援することで、ソーシャルケアの負担軽減になる。保護でなく予防するという観点が大事。親ケアラーの支援もしないと、子どもがネグレクトされたり悪循環が起きることもある。

【齋藤】日本では18歳以上のケアラーを支援する法律がない。ヤングケアラーへの社

会的関心の高まりはみられるが、一方で親責任を強化する流れもある。

【Andy】イギリスでも18歳未満のヤングケアラーを守る一方で、18歳以上については大人だからという理由でそういうケアが行き届かない。ケアをしながらでもどうやってつぎの段階につなげていくか。イギリスではWhole Family Approachが採られているが、日本はそこが難関になる。個人や団体が参加できるネットワーク（Young Carers Alliance）をつくった。150の団体が参加している。ほとんどがイギリスからの参加だが、全世界を対象とする。毎週ニュースレターを発行している。子どもの頃は日本のようにサポートが全くなかったのが、今やっとここまで来たと思っている。もっと頑張らなくちゃと思っている。

【亀山】調べたところ、イギリスで2014年～2015年に法律ができた時、ヤングケアラーだけでなくヤングケアラーの親とも連帯したという情報がでてきたが、それはどういうふうになった？

【Andy】Children and Families Act 2014([Children and Families Act 2014 \(legislation.gov.uk\)](https://www.legislation.gov.uk/ukpga/2014/6/contents))とCare Act([Care Act 2014 \(legislation.gov.uk\)](https://www.legislation.gov.uk/ukpga/2014/18/contents))があり、これらはWhole Family Approachが土台になって通過した法律。親ケアラー、ヤングケアラー、ヤングアダルトケアラーも対象。ヤングケアラーがどういうケアをしているかを明らかにするアセスメントをする法律。

【斎藤】Carer's Trustで働いてどれくらい？

【Andy】2022年の1月～。その前は6年半、ケアラーズトラストの傘下で認知度をあげるプロジェクトの担当だった。その仕事は今も続けている。ヤングケアラーに関する仕事は15年くらい続けている。

【斎藤】Young Carers Festival([Young Carers Festival | The Children's Society \(childrenssociety.org.uk\)](https://www.childrensociety.org.uk/young-carers-festival))にすべて参加している？

【Andy】今年で20回目。14歳の時にボランティアとして参加した。スコットランドのフェスティバルは300人くらいの規模、イギリスのフェスティバルは1000人くらいの規模。

【河西】ヤングアダルトケアラーはなぜ25歳までなのか？

【Andy】法的な定義はない。ケアにお世話になっている子どもたち、知的障害・身体障害をもつ子どもたちの支援が25歳までなのでそれと同じような感じではないか。また、子どもの頃にヤングケアラーという認識がなくても、成長してヤングケアラーだったと気づいたときに支援を受けられるように25歳までになっている。他の国では、ヤングケアラー/ヤングアダルトケアラーとわけていない場合もある（例：アメリカではCaregiving youthという）。その意味ではアメリカも遅れている。オーストラリアも追いつこうとして支援がすすんでいる。

【佐野】知的障害や身体障害の団体との連携はあるか？

【Andy】Disabled Children's Partnership([Home - Disabled Children's Partnership \(disabledchildrenspartnership.org.uk\)](https://www.disabledchildrenspartnership.org.uk))のパートナーになっている。Sibsや精神疾患の親をもつ子ども等、様々な団体がYoung Carers Allianceに加盟しているのでコネクションはある。他の団体と比べてもイギリスにはこういう慈善団体やグループが沢山ある。

【斎藤】Whole Family Approachを採ることによってより効率的に家族を支援することができると思うが、どういう多機関連携が理想だと考えているか？

【Andy】「No Wrong Doors」（間違ったドアはない）というガイダンス・合意書をつくった。子どもが大人のサービス・子どものサービスに関わらずどのドアをたたいてもサービスにつながるという意味。

※Children's Society、Carers Trust、大人のサービスに関係する団体であるadass(directors of adult social services)、子どものサービスに関係するADCSの4団体が連盟をつくった。

<https://www.local.gov.uk/sites/default/files/documents/no-wrong-doors-working-to-27d.pdf>

【Andy】支援の2つの大きなポイントは、①発見のシステムをつくる。②Whole Family サービスのシステムをつくる。

【佐野】政策的なものを進めていくときに議員との個人的な連携のなかで進んでいくのか、政府と団体とのやりとりのなかで進んでいくのか？

【Andy】両方のアプローチをしている。教育省の人とよく会っている。簡単に進むこともあれば、ヤングケアラーの権利を取得するのは難しかったためにいろんなキャンペーンをする必要があったことも。重要なのはAPPG（All Party Parliamentary Groups、党を超えたグループ）。慈善団体が政府に掛け合っても難しいので、何人も国会議員が集まったほうが力がある。ヤングケアラーの実際の声を聴くこと+エビデンスが大事。

[All-Party Parliamentary Groups - UK Parliament](#)

○参加者の感想（河西）

- ・当事者だった立場の方が仕事としてケアラー支援に関わっていることに力をもらえた。日本では当事者が活動をする際に多くの場合はボランティアや薄給で関わることになるが、そこに給料がついて仕事にできるしくみは大切だと思った。
- ・イギリスも初めは日本のような現状からスタートしたが、今はYoung Carers Allianceを通したヤングケアラーだけでなく様々な領域とのネットワーク形成、支援に向けたガイドの作成や政治面でのロビー活動など社会的な力をもっている。日本もヤングケアラー・ケアラー支援が「ブーム」として短期的かつ一時的に終わるのではなく、息の長い地道な取り組みを見据えた活動が必要だと感じた。
- ・これからのYCARPは大学という研究機関としての強みを発揮すべく、当事者の声を聴くとともに、全国にある支援団体のとりまとめ的な立ち位置としてCarers Trustのような情報収集・発信やネットワーク形成、研究活動により力をいれていけたらと感じた。

○補足資料（写真等）



Andy McGowan氏との記念写真



Andy McGowan氏とのミーティングの様子

立命館大学 人間科学研究所
子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト
(Young Carers Action Research Project : YCARP)
carersactionresearchproject@gmail.com



Supported by
 日本
財団
THE NIPPON
FOUNDATION